

おばけの季節【江戸村篇】

陽羅義光

長くなりました。

めちゃくちゃ長くなりました。

数少ない読者もそろそろ飽きたころでしょう。

これほどおばけが登場する読み物は、古今東西、古往今来、『おばけの季節』が一番です。

そこでやめようとしたのですが、どうにもこうにも、あとからあとからおばけがやってきて、おれを書けわたしを捨てるなど、うるさくてしかたありません。

それならいっそ、百年後、千年後も、けっしてだれにも破られない、破る気もおきない記録を打ち立てようと、続けることにしたわけです。

もっとも未来の作家はそんな物好きもいないでしょうし、こちらもそんな理由で書いてきたわけでもないのですが、コケの一念というものもあります。

それでは、やれやれ、（と肩をもみつつ）さあはじめるとしましょうか。

禿光山人 拝

* *

人生いろいろおばけもいろいろ、とめずらしく懐翁が歌をうたっています。

「かいじい、うまいのう」

ぼくがほめると、すぐにやめて、

「きんちゃん、くるならくと、連絡ください」

と懐翁はいったものです。

「でんわもねえ、むせんもねえ。それでどうやって、れんらくするんじゃ」

「わたしと金ちゃんの仲でしょう。ぴっぴっつとおともだち光線で」

なるほど、その手があったかとおもったが、

「わしはびびいびいびいとやったんじゃがのう」

「それは雲雀（ひばり）の声とまちがえますね」

「かいじいは、のんきにうたっていて、きづかなかっただけじゃろ」

「それでは失礼します」

懐翁は祠に消えようとしています。

「まてやまて、おくでまたうたうんじゃろ。つまらんつまらん」

すると懐翁はむくれて、

「歌はすばらしい。歌のない人生なんて」

「おぼけのいない、じんせいと、おんなじかのう」

「そうですそうです。では失礼します」

懐爺は祠に消えようとしませす。

「までやまで、わしのはなしをきけ、ごふんだけでもいい」

「居眠りしたいので、三分でお願いします」

時間がないので、ぼくは早口でまくしたてました。

「さいきんわしは、かいじいのおぼけばなしばかり、きいとるぞい。わしはおぼけに、であってないぞい」

「何かご不満でも」

「ふまんもふまん、ふまんじゅうじゃ」

「けれども、おぼけは危険ですからねえ」

「きけんじゃない、おぼけなんか、いるのかのう」

「そういう意味ではありません。昔からおぼけは、教育や宗教に利用されてきました。いまでも、授業をさぼったり宿題を忘れると、おぼけにやっつけられるとか、よくお母さんがいうでしょう。あれと同じで、この神様を信じないと、おぼけにやっつけられるとかいう、けしからん連中があとをたたないのです」

「なるほどのう、おぼけをへたにりようすると、おぼけにやっつけられるのを、わかったらんのう」

「さらにけしからんのは、いわゆる人種差別ですね。醜い人間や不具の人間や影のうすい人間に対して、鬼だおぼけだ幽霊だと、ののしる連中がいるでしょう」

懐爺の蘊蓄（うんちく）を茶化すと、また祠に消えようとするからやりませす。

「おるおる。わしはそういうやつに、いつもいうとる。そんなこというとると、ほんもののおにや、おぼけや、ゆうれいに、ころされるぞい、とのう」

「ですから金ちゃんも、おぼけのことはほどほどにしておきませんと」

「はなしがちがうぞい。わしはおぼけを、りようしたりせん」

「利用はしなくとも、料理はしたいんですね」

「りょうりも、きれいじゃ。わしはのう、かいじい。たんじゅんに、おぼけに、あいたいだけじゃ。そいでもって、おどろいたり、こわがったり、したいんじゃ」

「解っています、解っていますよ。では、お休みなさい」

「さんぶん、たったのかのう」

「腹時計では三十分経ちました」

「ならば、じかんもくそもない。いねむりしたら、おおごえでうたうぞい」

もう、嚇すしかありません。

「それはたまりませすね。了解しました。しかたないから、金ちゃんの望みを叶えてさしあげませす」

「ほんまかいな」

しつこいのはいいことだ、とおもいこみました。

それはおとなになっても、そうで、そのおもいこみのために、何回女性にふ

られたことやら。

「わたしたちの村の隣村の隣に、通称〈江戸村〉とよばれているところがあります。そこにはいまだに、昔ながらの江戸おぼけがいます」

「えどのう、ええのう」

「行ってみますか」

「いくぞい、いくぞい。かいじいも、いっしょならば」

「わたしはそんな暇はありません。居眠りするので忙しい」

「わしひとりかい」

「怖いですか」

「あほか、わしが、おぼけをこわがる、たまか」

懐爺が一緒なら、たのしかろうとおもっただけです。

「たまたま失言しました」

「たとえば、どんなおぼけが、いるんかのう」

「そうですね、そういうことは、あらかじめ知っておいたほうが、得策ですね」

「それぞれ、その、とくの、さくじゃ」

「いまは何月でしたか」

「はちがつじゃ。なつやすみじゃあ」

「八月の江戸村では、ほとんど毎日【だいまようぎょうれつ】が見られますね。江戸村の大通りは見物人であふれます」

「おもしろそうじゃのう」

「幽霊の【だいまようぎょうれつ】です」

「よけいにおもしろそうじゃのう」

「でも見物人が千名を越えると、一瞬のうちに消えてしまいます」

「つまらんのう。そういうみせものの、おぼけじゃのうて、おそろしいおぼけを、おしえんかい」

懐爺は遠くを見る目をして、

「江戸村の夜空には【ゆうれいぼし】が見られます。でも当時の資料にこうあります。〈これを見るときはたちまち死す〉と」

「おかしいじゃないか。みたひとは、しんじまうんじゃろ。ならば、みるとしぬつて、だれがしょうめいするんじゃ」

ぼくは疑問をなげつけました。

しどろもどろになるとおもったが、懐爺は平然とこうこたえます。

「それは、たぶん、そばにいたひとですね。【ゆうれいぼし】を見たとたんに仲間が死んだので、自分は見ないよう気をつけて、村びとに伝えたのですね」

「もしかして、そいつが、ころしたんじゃあんめえか。それで【ゆうれいぼし】のせいにしている」

「そうかもしれないし、そうでないかもしれない。まったく人生というものは厄介（やっかい）なものですな」

「それで、だれが【ゆうれいぼし】になったんじゃ」

「よくきいてくれました。八歳の女の子がいましてね。こどもを産みました。それが珍しいので、親がその女の子を見せ物にして大儲けしました。そのせいかどうか、女の子はすぐに亡くなり、【ゆうれいぼし】になったというわけです」

「そらあ、おやがわるい。おやだけ、ころせばいいんじゃ」

「それは正論ですが、世の中、その親みたいなのがいっぱいいますからねえ」

「その、おやみたいなのが、【ゆうれいぼし】をみるとは、かぎらんじゃろ」

「いやはや正論ですが、おぼけの世界に正論が通用しないのは、金ちゃんもごぞんじでしょう。とにかく星は星の数ほどありますから、どれが【ゆうれいぼし】かわかりません」

「ならば、【ゆうれいぼし】を、ふせぐてだては、ないのかのう」

「よくきいてくれました。ぼた餅を屋根に供えれば、災難から逃れられます」

「【ゆうれいぼし】はぼたもちが、すきなのかのう」

「わたしもぼた餅は大好きです。ですから半分供えて半分食う」

「いじきたないのう。そんなてだては、つまらんのう。わしなら、よなかでも、かさをさして、でかけるがのう。さすれば、うっかり【ゆうれいぼし】みることも、あんめえ」

「江戸村に行ったら、村びとたちに教えてあげてください」

「まあええ、ほかには」

「【つるべおろし】なんかどうでしょう」

「そいつは、みたことあるぞい」

「金ちゃんの見たのは、雨の日に大木のあたりで、上がったたり下がったりしている火の玉のことでしょう。あれではなくて、江戸村に鶴兵衛、愛称〈つるべ〉という落語家があります」

「きいたことないのう」

「人気のない落語家ですからね。それでも高座（こうざ）にあがると、なにかがのりうつたのように、見事な落語を演じます」

「なにが、のりうつっているんじゃろ」

「おそらく、落語の神様【らくちん】でしょうね。それではこれで失礼します」

懐爺の病気がまたはじまった。

「かいじいが、らくごをやらんでも、ええ」

「失礼しました。その〈つるべ〉が、いつからか【つるべおろし】にねらわれて、高座にでて話し始めた途端、かならず高座から落ちる」

「そらあ、しゃべれんのう」

「ところが世の中はわけがわからんものでして、その高座から落ちる様子がおかしいってんで、〈つるべ〉は一躍人気落語家になりましたね」

「それで、どうなった」

「あまりに人気が高いので、町の興行師に目をつけられて町に連れていかれました。最近ではよく映画に出て、高いところからこける役をやっているそうです」

「つまらんのう、おあとがよろしいようで」

「それでは【じんめんねこ】です。ひとの顔をした猫です」

「つまらんのう。ねこのかおをした、ひとのほうか、よっぽど、おもしろいがのう」
ぼくはつい正直にいつてしまいました。

おだてれば木にのぼる懐爺だとわかつているのに。

「でも【じんめんねこ】は、なかなかやることがおもしろくて、なにせ人間と同じくらいの図体（ずうたい）ですから、着物でもきれば、人間と見間違えます。それで村一番のお座敷きで、芸者をあげて徹夜でどんちゃん騒ぎ。朝になると着物を脱いで、すたこらさっさですから、勘定をもらいようもない。それに似たいたずらを何度もやるんです」

「どうやって、たいじするんかのう」

「当時の村長が、村中の猫を一堂に集めさせて、村の若いもんに皆殺しにさせ、なんと猫汁にして、若いもんを労（ねぎら）って食わせたんですね」

「そしたら、むらびとが、みんな、ねこになちまったりして」

「それでも面白いんですが、実は運のわるいことに、時代が元禄（げんろく）でしてね。ときの将軍綱吉（つなよし）は、〈生類憐れみの令〉というものをだしたので。それで猫を皆殺しにした若いもんは、みんな島流し、村長は首を切られてしまいました」

「だば、むらは、こまったじゃろうのう」

「はい、働き手がないんですから、とても豊かだった村は一転、ひどく貧しい村となつてしまいました」

「いまでも、まずしいんかのう」

「それが、次の村長が神社に木彫りの【じんめんねこ】を奉つたんです。そしたら数年経つて、とても豊かな村にもどりました」

「そらあ、こどもだったもんが、すうねんたつて、わかいもんになつたから、ゆたかになつたんじゃろ」

「そういつては、身も蓋（ふた）もありませんから、まあこのさい、猫神様のおかげということで」

「おぼけが、おかげに、なつたんか。くだらんのう」

またぼくはつい正直にいつてしまいました。

おだてれば木にのぼる懐爺だとわかつているのに。

でも懐爺はちつとも気分を害した風を見せずに、

「それでは次ぎは【いどがえる】です」

「なまえが、つまらんのう。いどにおる、かえるじゃろ。いぼがえるのほうか、まだましじゃ」

「江戸村には昔から、水を汲んではいけない、と伝えられた井戸がありました。恐ろしい【いどがえる】がいるから、というわけ。金ちゃんもごぞんじの芭蕉は、ほんとうは〈古井戸やかわず飛び込む水の音〉と詠んだのですが、この【いどがえる】の存在が気になつて、〈古池や〉に変えたといわれています。それを、そんなものは迷信だと、村にやつてきた奉行様が、配下に水を汲ませたのです。する

と、水桶のなかに、猫ほどの大きさの蛙が入っていました。これはちょうどよいと、【いどがえる】を丸焼きにして、みんなで酒の肴（さかな）にして食ってしまいました。その翌日、奉行様も配下も、食あたりで全員死んでしまいました」

「それで、そのあとは、どうしたんかのう」

「村びとは、残った肴の滓（かす）を井戸に投入れました。すると、井戸の底から【いどがえる】の鳴き声がしたそうです」

「それで、いまは、どうなっているのかのう」

「【いどがえる】は健在だそうです。もう牛ほどの大きさになっているはずですよ」

「そらあ、うまそうじゃのう。【いどがえる】をくってみたいのう」

「金ちゃんは便秘症ですからいいかも。わたしは下痢症ですからやばいですね」

「そのていどの、もんだいかのう」

「その程度の問題であってほしいですね」

なるほど、あいかわらず懐爺はいいかたがうまい。

「まだおるんかのう」

「まだまだおります。猫、蛙ときましたから、本命の狐。【はちびのきつね】ですよ」

「わしも、きいたことがあるのう。しっぽがはちほんある、きつねじゃろ」

「【ねこまた】は尻尾が二つ、それも裂けているだけといいますから、八本の尻尾は凄いですねえ」

「そらあ、とつぜんへんい、というもんじゃろ」

「突然変異なんていったら、おぼけの大半はそうなります。ですからここは素直に【はちびのきつね】」

「すなおにしたら、おぼけは、にげるかのう」

「すなおな人間には、おぼけは近寄りません」

「はつみみじゃのう。みみから、うろこがとれたわい」

「金ちゃんにおぼけがとりつくのは、素直ではないからですよ」

「はつみみじゃのう。いやないかたじゃのう」

「本当の話は厭（いや）なものです」

「いやいやいや、やいやいやい」

「冗談はさておき、【はちびのきつね】ですが、美しい女のひとに化けて、男の生き血を吸うというのが、常套（じょうとう）ですよ」

「じょうとう、じゃのう。わしもいちおう、れっきとしたおとこじゃから、びじょに、いきちを、すわりたいのう」

「じつは、わたしもです。わたしの場合は血が濃いですから、薄めてもらいたいですね」

「だば、いっしょにやってもらおうかのう」

「しかし、もしわたしが病気だったとしたら、【はちびのきつね】を経由してうつってしまうかもしれません」

「もんだいがないぞい。わしがさきに、いきち、すってもらおうからのう」

「恐れ入りました」

ずる賢くも懐爺は、頭を下げるふりをして、祠に入ろうとしました。

よほど居眠りをしたいのかもしれませんが、簡単にそれを許すべくではありません。

「まだまだおると、いったらうが」

「あとは直接、江戸村に行ったらしめつけてくださいな」

「きつねのつぎは、たぬきかのう」

「はい、狸。古狸で【こりこり】といいます」

「たぬきじるにしたら、こりこりと、うまそうじゃのう」

「煮ても焼いても食えぬ古狸です。【こりこり】も【はちびのきつね】と同様に美女に化けます。あるとき村一番の醜い男が、村一番の美しい女と結婚をしました」

「それは、おおきなもんだいじゃのう。かいじいが、となりのおねえさんと、けっこんするみたいじゃのう」

「けれども奥さんは、半年も経たないうちに亡くなりました。男の嘆きは半端（はんぱ）ではありませんでしたが、ある夜、死んだはずの奥さんが現れて、男の夜具に入ってこようとすることを、死んだ人間が生き返るはずはないと、男はとっさに短刀で突き刺してしてしまいます。まちがいなく【こりこり】のしわざだと信じたのですね」

「それは、もったいないのう。わしなら、えんりょなく、おねんねするがのう」

「うそおっしゃい、女嫌いの金ちゃんが」

なぜか懐爺は怒っている様子です。

たぶんこの話の残酷さに怒っていたのでしょう。

「さされたおくさんは、どうしたのかのう」

「奥さんが、刺された短刀を抜きもせず、そのまま逃げたので、男は【こりこり】までえと、追い掛けたのです。血が点々と落ちていて、それをずっとたどっていきますと、おお、話すのも辛い」

「つらくとも、はなせ」

「その血は、男の奥さんのお墓に続いていて、なぜかそこでとまっていた」

「いみがわからん」

「つまり、男が結婚した美しい女が、もともと【こりこり】だったのです。しかし【こりこり】は、老衰で死んでしまいました。それを男があまりに歎くので、骨になった【こりこり】は、元の美しい奥さんになって、逢いにきたのです」

「あわれじゃのう」

「まだ話は続きます。男は意を決して墓を掘り起こしたのです。するとどうでしょう、短刀を大事そうに抱きかかえた骨があるばかりでした」

「あわれじゃのう」

「男はすべてを覚りました。【こりこり】が醜い男をあわれんで、結婚してくれたのだと。そうして男が亡き奥さんを恋しがっているのだと、再び現れたのだと。【こりこり】は二度まで化けて出られます。しかし三度は無理なのです。そのことを知っている男は、墓の前でその短刀で死にました」

「かいじいよ、わしも、おんなぎらいを、やめようかのう」

「女好きにならなくてもいいですよ。【こりこり】は人間の女ではありませんから」

「それもそうじゃ、てっかいじゃ」

「さすがは金ちゃん、それでいいのです」

「そんなもんかのう」

「そんなもんです。それでは行ってらっしゃい」

「どこに行くんじゃ」

「江戸村に行くんじゃなかったんですか」

「もうやめた」

「わたしの話し方がつまらなかったのですかね」

懐爺はすこししょんぼりしたふうでした。

「いんや、かいじいのはなしは、おもしろかったが、くらくらしてきたんで、かえるんじゃ。あしたになったら、たぶんわすれるでろう」

というわけで、ぼくは江戸村に行く機会を失いました。

おとなになって、江戸村とよばれるところへ行ったのですが、おぼけはいませんでした。

猫はいましたが、【ねこまた】でも【じんめんねこ】でもありませんでした。

井戸もありましたが、なにしろ水がないので【いどがえる】もありませんでした。

そうそう、二回目に行ったときには、【だいみょうぎょうれつ】ふうなものをやっていたんですが、残念ながら幽霊ではありませんでした。